

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	うえむら たけお 上村 岳生	所属・職名 財団法人 国際宗教研究所 研究員
発表題名 (英語)	「仏教における悪の問題 一天台性悪説を中心に」 Problem of Evil in Buddhism	
著者名	上村 岳生	
会議名 (英語)	「東アジア宗教文化学会」 East Asian Association of Religion and Culture	
開催地(国、市)	大韓民国 釜山 東義大学校	
参加期間	2008年8月1日～8月4日	

2008年8月1日から4日までの4日間、「東アジア宗教文化学会 (East Asian Association of Religion and Culture) 創立記念国際学術大会」が韓国の釜山において開催された。この学会は、日・中・韓3国の研究者が中心となり、東アジアの宗教文化に関する研究の促進と国際的な学術交流を目的に、長い準備期間を経て本年発足することとなった学会である。

○発表内容

報告者は、「宗教史・宗教思想史」の分科において発表した。発表のテーマは、「仏教における悪の問題」である。仏教は東アジアに共通する文化的な基盤のひとつである。この仏教の現代的可能性を探求することで、近代の危機といわれる時代において新たな価値と実践を生み出すための鍵を見出すことが、報告者の問題意識の一つであった。

近年、「他者」や「暴力」といったキーワードによって仏教の批判がなされるようになっている。そのような議論の文脈を念頭に置きつつ、報告者は「天台性悪説」といわれるものに注目した。それは、仏も悪を本質として持つはずだいう、主に天台の伝統で説かれてきた教説である。この思想を、超越者や絶対的真理の実体化を徹底して避ける縁起思想の帰結として解釈することもできる。そこから、絶対者や真理のようなものに悪を還元してしまう思想的傾向に対し、仏教内部からの批判が可能となる。仏と悪は働きとして同一であるというところに、仏の救済と凡夫の修行という実践の根拠があるということが、本発表の一応の結論として示された。

○質疑応答

以上の発表に対し、いくつか質問がなされた。ここでは、指定討論者のイ・ヒョウン氏(韓国宗教文化研究所)のコメントの抜粋を挙げておく。

本発表は、仏教における悪の概念を天台宗の性悪説と善悪の相対性により説明している。…キリスト教における悪が善-悪の二元論的な形態の悪であるのに対し、仏教においては、見方によって

学会発表渡航支援報告書

善だと思われるものが悪だということもあり得るし、悪だと思われるものが善だということもあり得ると言う。言い換えれば、「関係性」を通じて善悪の概念も柔軟に設定され得るということである。

本大会の趣旨の一つとして、東アジアに特有の宗教文化に対する「独自の研究視野と研究方法」を開拓するということがあった。今回の大会で特徴的だったのは、宗教研究における国際的な相互協力の必要性が強調されていたことと、宗教研究者と宗教者の対話が重要であるという認識から、宗教者の参加も多く見られたことが挙げられる。「東アジア」を中心とした新たな国際的ネットワーク形成の場が築かれたことは、本大会の大きな成果であろう。

